

١٥٠٠

「ラブ」。

漢字にしたら、「裸舞」。

あたしはただ、裸で舞いたいだけ。

狂ったくらい、裸で舞いたいだけ。

でもそのうちに気付いてしまう。

彼が欲しかったのは「裸婦」なんだと。

あたしが裸で舞ってるだけで、彼はとことんラフを求めている。

彼にとって、濁点は重いらしい。

あたしには付いている、濁点が重いらしい。

気付いてしまったからには、いつまでも躍っていることなんてできるわけもなく。

急に恥ずかしくなったあたしは、いそいそと服を着て、でも大人しくしてるだけなのも癪だから、せめてもの反抗で手近なものを投げ付ける。

それでも彼は平気なもので、向けられた背中に当たった濁点は空しく返って来るだけ。

ころころころころ。

転がった濁点はあたしの足元にまで転がって、そのまま動かなくなった。

今のあたしを例えれば、達筆なタッチで「恋」と書かれたガスボンベを背負って、左手に導火線、右手にライターを構えた、なんだかよくわからない格好なんだ。

ライターで導火線に着火すれば火は瞬間にガスボンベに至って、「恋」の文字が爆発するんだ。

どっかーん！ って。

何もかもが燃えてしまえば、もう裸で舞うことしかできない。

あたしはただただ、狂ったように踊り続ける。

これぞ「裸舞」。「ラブ」なんだ。

なのに今持っているライターときたら、ガス欠ときたもんだ。

どれだけ火打ち石をこすったところで、一向に火なんて出してやってくれない。

目の前の背中は動かない。

足元から拾い上げた濁点をいじくって、おもむろにその背中に狙いを付けた。

再び飛べ、濁点！

発射！

ずどーん！

ころころころころ。

またもや足元に転がってきた濁点。

かわいいそうだね、おまえも。

よし次こそは、と先程より狙いを研ぎ澄ます。

背中に「恋」のガスボンベを背負うあたしは、この時ばかりはスナイパーに化ける。

このまんまじゃ、どう足掻いたって火を出してくれないんだ。出してくれなきゃ困るんだ。

右目をつむって、左目を凝らす。濁点と背中を結ぶ線を、限りなく一直線に。

口の中にたまった唾を飲み込んで。

鼻から息を吸って。

集中力を解き放つ。

……ばかばかしい。

一度は構えた濁点を、胸のポケットに仕舞い込む。次の出番まで、チャックまでして嚴重に。

ガス欠のライターなんて用はないのさ。

いつでも火の吹けるライターじゃなきゃ。

いつまでも火を吹き続けられるライターじゃなきゃ、意味がないのさ。

ってーか、火の吹けないライターなんてライターじゃないじゃん。

ライターじゃなくて、それはただの……役立たずだ。プラスチックの、役立たずだ。

部屋を後にする間際、わざとらしくくらい大きな音を立ててやったのに、起きる気

配はまったくナシ。

うん、救いようもナシ。

朝の空気は凍ったように張り詰めていて、バスを待つ間はコートに首を引っ込めなきゃならなかった。

ぱたぱたと足踏みしながら、凍える両手に息を吹きかける。

右手を入れたコートのポケットから、ライターが出てきた。

ガス欠ライター。

よくよく見れば、わずかにガスが残っている——今なら、火が付くかもしれない。

まだ、付くのかもしれない。

ちよっと、火打ち石をこすればいいだけだ。

かちっ、と音を立てて、こすればいいだけ。

左手に持った導火線は「恋」と書かれたガスボンベにつながっていて、火を付ければ瞬間にボンベに着火する。

こすって、みようか。

ガスが切れたって、またガスを入れれば火は付くじゃないか。

前のように、また火を付けてくれるじゃないか。

ガスを、また入れれば。

入れれば……

遠くから、バスの音が聞こえた。

意を決してライターを握り込む。

ばかばかしい。

本日2度目の悪態と一緒に右手を振りかぶった。

「ちくしよおおおおおおおおおおおお！」

高く飛び上がったライターは曇天に紛れて消えた。

今日の天気は、曇りのち雨。ところにより雷雨でしょう。

明日からは晴れ渡り、清々しい青空に恵まれそうです。

あたしの、天気予報。

「らぶ。」

Written by nakoso

© nakoso 2008

Release Date 2008/11/12 on Bottle Novel

<http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>

Twitter (as inabetz) :

<http://twitter.com/inabetz>

Mail :

[nakosokan@gmail.com](mailto:nakosokan@gmail.com)



「らぶ。」 by nakoso is licensed

under a Creative Commons 表示・非営利 2.1 日本 License.

Based on a work at <http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>